亀岡

農家に聞いたはなし

Stories from farmers

Kameoka KIRI Art Cultivation

この本は二〇二〇年にかめおか霧の芸術祭と亀岡市農林振興課の取り組みとして開催された
「亀岡の風土を伝える 実践を踏まえた編集・ライティングワークショップ」の成果をもとに制作されました。

はじめに

農家さんが近くにいるということ

私が亀岡に引っ越してきてから五年が経とうとしている。まずびっくりしたのは野菜のおいしさである。と言いたいけれど、実際はそうではない。はじめの一年くらいは農家さんに会う機会もなく、仕事をして、野菜はスーパーで買って、帰って、料理をして（たまに外食）、食べて、寝る。そんな毎日だった。

ある日、亀岡にたくさんいる農家さんをもっと知っていこうという「かめおか霧の芸術祭」の総合プロデューサー松井先生の提案のもと、若手農家さんを中心に調査が始まった。私は、どんな人が、どのような場所で、どんな野菜を作っておられるのか知るためにいろんな農家さんを訪ねて行った。

それは、聞けば聞くほど、知れば知るほどわからなくなるような世界でもあったが、様々な哲学のもと、野菜づくりをされている農家さんがいることを知った。野菜の育ち方や、農法の話、土の話、自然との付き合い方、暮らし方など、今まで触れてこなかった言葉を教えてもらう機会にもなった。そして、そんな人たちが亀岡にたくさん住まれていることに興奮した。農家さんの話を聞いていると、畑や育っている野菜がものすごくかっこよく見えるのだった。

驚いたのは農家さんごとに、同じ野菜でも全然違う味がすること。それは当たり前のことのはずなのに、その当たり前を通り越すくらいに味が違うのである。新鮮でおいしい野菜が近くで育てられていることを知って、心底、幸せを感じたのだった。

それからというもの、友人が遊びに来た時は、料理して振舞ってみたり、BBQをするぞーという時は、みんなを友人の農家さんのところに連れて行って、採れたての野菜を買わせてもらったり。母が大病して、大阪にしばらく入院していた時もそうだ。ずっと食べ物が食べられなかったのがとても心配だったのだが、「あの農家さんのカブを食べさせてあげたい」という思いでいっぱいになり、母に届けに行ったこともあった。

なぜその農家さんだったかというと、とてもおいしくて、食べたらびっくりするくらい元気が出たからである。

新しい農のかたち

農のかたちは日々更新されている。
縄文時代から農業が行われているにもかかわらず、今でも新しいかたちが生まれているのである。どんなパートナーと取り組むのか、どのような農法をするのか、何の野菜や果物を育てるのか。農家それぞれの哲学で、果敢に試行錯誤されている。

- SHIRAISHI farm（家族農園）…… 4
- 宮前農園（イチゴ農園）…… 7
- ソルモンド（微生物酵素農法）…… 10
- 日本クルベジ協会（土壌炭素貯留）…… 13

農家さんが近くにいるということは「そりゃそうだ」。世界中どこでもそうだ、と思っていたけれど、詳しく話を聞いたり、作られている野菜を食べてみたり。そうしていると、どうやらそれは、「そりゃそうだ」ではなく、「特別なこと」ということにやっと気付き始めている。そして、そのことを人に伝えたいという思いが芽生えた。

農家さんの言葉や、畑の様子、野菜の味を人に伝えるときに、言葉の力、文章の表現はすごく重要で大切にしたいことである。しかし、どのようにこの感覚を発信し、人と共有していけば良いのか悩んでいた。そんなとき頭に浮かんだのは亀岡にもよく来られ、農家さんのことも知っている編集者、文筆家の村松美賀子さん。

「農家さんにインタビューし、見聞きしたことを言葉にするための講座をしてほしい」とお願いに行くと、村松さんは快く引き受けてくださり、文章を書くときのポイントや整理の仕方、話を聞く姿勢などを教わる講座を開いてもらえることになったのだ。

参加者は亀岡市民が半分、京都市や大阪からも来られ、ほとんどの人がインタビューや、ライティングをするのは初めて。しかし、見聞きしたものごとをうまく伝えられるようになりたい！　という熱意を感じた。

それぞれがインタビューに出向き、農家さんから聞いた話の中から、人に伝えたい言葉を整理する。参加者同士で発表しながら、お互い知らなかった情報を話し合える時間がとても新鮮であった。なかには「今まで勝手に農法に良し悪しがあると思っていたけれど、農家さんの話を実際に聞きに行き、いろんな暮らしや哲学を知ることで視野が広がった」という方もいた。

見聞きしたことを文章に短くまとめるのは容易ではなかったが、村松先生の包み込む優しい空気に後押しされながら、十人の参加者により、十組の農家さんの言葉が立ちあがり、この本が生まれた。

この本が農家さんの言葉を届けるひとつの術となり、これを読んでくださった方々が「農」と繋がるきっかけとなれば。そして、亀岡の広大な畑の一端を知り、それを営む人々のことを感じてもらえればと思う。

かめおか霧の芸術祭 プロジェクトディレクター　辰巳雄基